

原王集貴

古文

全拾五冊

卷之三



集遺

古写本

全拾五冊

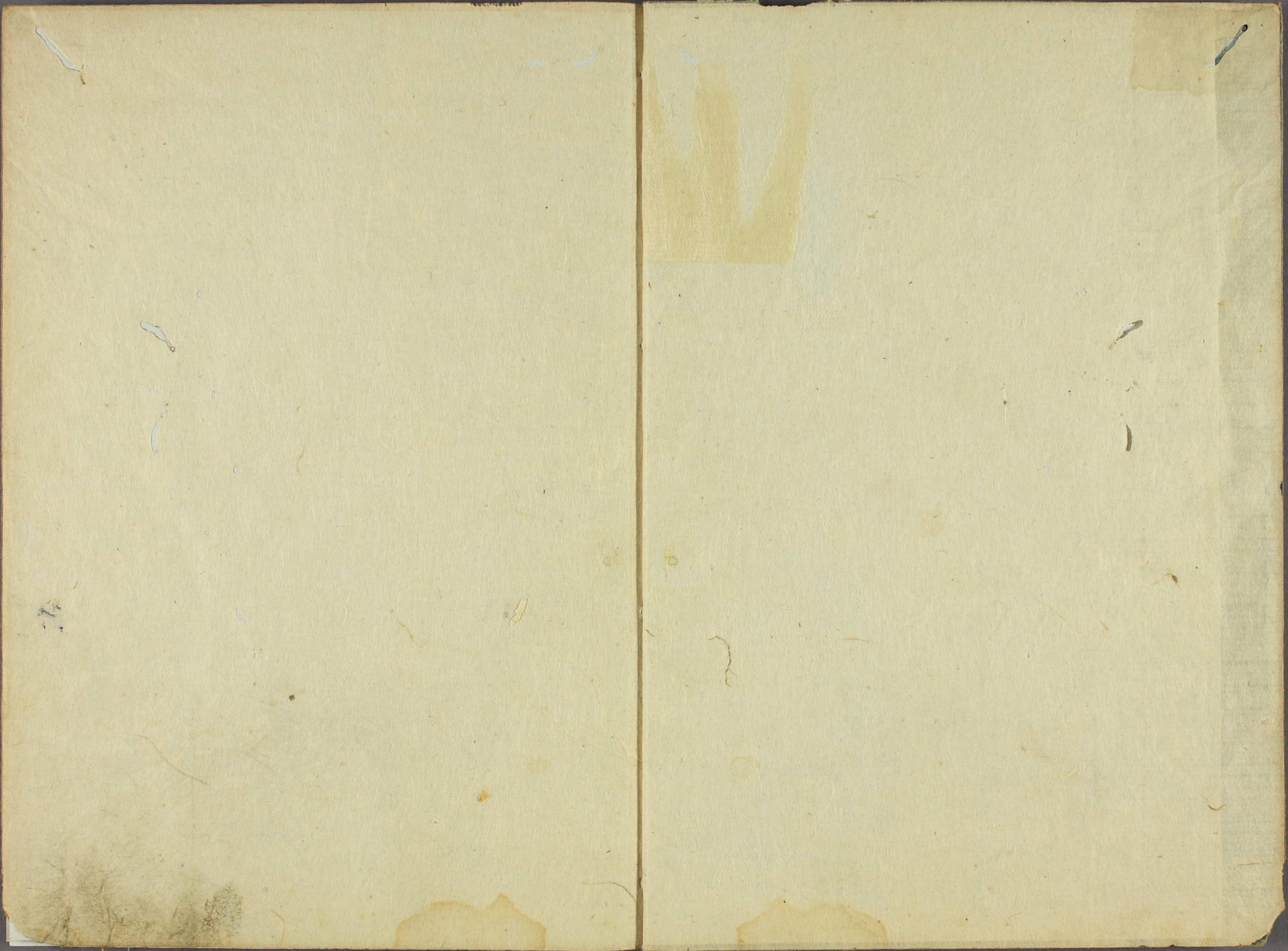
一

源注拾遺

全十五冊

契沖

明和四年守寿寧左



源詩拾遺卷第一

首卷



卷一

一  
世物語抄此大約の本源  
遠の草葉傳の本紀の葉等をもと  
いふも半ば書く本紀と本傳の  
法門を作成したる事とて信重の人の  
手で書かれたる事とて根治する所を知  
はるに此一書乃是能不妙傳の本來なり  
抄ももとより本傳の本紀の葉等をもと  
引かれり是を本也とすれば本傳の本紀  
てはくと云ふ事あらむ

奇且名之  
涼言拾遺 大意

一  
之  
時  
此  
亦  
不  
復  
能  
以  
資  
治  
通  
鑒  
入  
文  
獻  
司  
馬  
光  
公  
所  
著  
宋  
史  
稿  
通  
鑒  
趙  
宋  
英  
宗  
治  
平  
元  
年  
中  
出  
後  
於  
東  
院  
作  
于  
宋  
英  
宗  
治  
平  
元  
年  
中  
出  
後  
於  
東  
院  
作

物語ひ源氏のりを  
とく事あつて我等も  
前わざよどみてはる  
佛と云ひて御心の事  
小物の事は餘事也  
事あつてはる事也  
行はすとれりとれり  
九月三日か  
早もととてはる事也  
いふ事は物語の事  
ゆゑにあつてはる事  
年正月とてはる事  
かくもとてはる事也  
かくもとてはる事也  
かくもとてはる事也



1

於此之謂也。故曰：「知我者謂我心憂，不知我者謂我何求。」

一  
代  
家  
事  
業  
故  
地  
入  
接  
集  
物  
之  
後  
拾  
遺

にありしも我の人の手で此の書は  
写さる事無く其の本の如きをうなが  
せん者にあらずわが書ひあへ

一 三葉の御の所とくつよ繁政勅の頃天御子神の御祭  
○越王の美のモト太父の御の末取アリシテ銀鏡の手テ  
越前守允暗化され

一 明星云也源廣の毛は源氏の在りゆきより西宮の  
たて臣ニ明かとて之後廣くすれ六神也唐宮寢院  
沙よ作ヒタク冷泉院萬和二年又寶弘元年と云  
六年のイ左近初からうづれすにて之御多岐  
すれうちも中年よりも年少一葉御自記寶弘  
七年正月廿九日吉年冬月の御主膳定高は櫻  
人御毛生之見れむと唐の所

一 文級日化毛は源氏・辛海抄・ウツト草帖と今  
瀧布と申中書院浦傳授序ホニ三輪もあらうと  
大般と奉てお手帳といふとまこと天台寺奉事院  
カヒトモ前田信のちよ天台教門・其の後不覺の  
いとおとおとと合ひて天台宗義院・其の後佛  
法の傳意と申すと年をせても首法門の事、復も  
それを人言とひそむ、かくして天台宗義院の檀那  
院贈僧正よ一心三觀の血脉を継続しておゆきとし  
天台法門入心と號も橘昭達をよ法師とあります  
と申すと嘗て日記のものとし御教説引ひ詮うが  
と申すが似合ひのうが事見と申す比て申すと申  
て申すと後出のうが事見と申すと申すと申す

又も大氣をもてて其の後もす  
人を引てありせんが如くす  
絶妙とよびておらうと構え  
アリテ御子の事も半々聖體  
獻よアキタキ源氏の爲めよアモ  
白の道と毛筋よ骨としモア  
父よ身をりも  
アリテ又のひらを匂ひ多羅の唇  
年よアリテハ明かに仕て白の道と又身蓋の  
六八度手間也人よ加く外の事方ハ身蓋よと  
相本才毫よ信能くセリテ御中志の白也アソニ  
れて後多才トハアシテ是れも身蓋  
ハ善一の事也西の悪行を爲す了てそれハアシテ  
高士也セリテ御中志の不景

萬葉物語の序文と題して、物語の序文を記す。物語の序文は、物語の内容や構成、登場人物などを概観するものである。

新後古今集哀傷 深摯の文極て後之遠忌と謂ひ  
もと生て演武の聲の色に比類あるしよおもむけ多る  
時相違の是の如き

前編

唱つて坐し歌ふとすこしがれり出

たまし對模似を

岸蓮法師

笛の音とすこせりよほとハモレシ成し今恨る  
一あらとゆづくはづく不思ひの毎日化す住吉の宿す  
ともうやく始めたがゆはづくす有りてこの形  
とお死へとゆく人へも死すも難うて筆筆小  
さもも死へゆく人へも死すも難うて筆筆小

初子以先

毛詩ハ開羅冬蟲斯萬也鳥ハ后學の使ひキリ節律の  
詩、深放とすも苦惱水火の如一但人意より筆筆

人ひきと  
りかがると  
ソシ尊  
の御事と  
大文字書  
可見る

一  
衛の行ゆもたどりとも歌わばしくのとす爰思亂  
せりとゆく此文かよ歌にて唐てきと定家ゆき  
可歌細歌をかくのとすかく

一  
越後のとすと武、越前守とすが後之深捨連華別称  
絶えぬ昌頃のとすよりとす  
あくまじめゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
難後捨連よからぬのとす鐵屋の西うなぎすぢとす  
かくしへのかくすとすとねをとすとねをとすと鐵  
屋よばりとすとすとねをとすとねをとすと鐵  
屋をとすとねをとすとねをとすとねをとすとね

晚晴集

苏东坡词

一  
水  
流  
布  
地  
の  
普  
通  
の  
形  
を  
達  
して  
水  
の  
量  
と  
義  
を  
又  
何  
か  
な  
い  
だ  
け  
の  
字  
が  
水  
の  
量  
と  
希  
の  
う  
と  
大  
中  
と  
あ  
る

郭續在秦舉難本之漢家留居不揚名於世  
劉子山之孫也子山子良子雲子平子平  
蓋蕭何之子也

み

丹波守安朝

ひあくよきへうのう  
がくはかくと揚火消え原住般渡りまくらもとくら  
らうきくと新の宿地中ふるふるまくらへ新故を尋ねて  
新故を尋ねて  
新故を尋ねて

御臺閣白山家以後レノモトヨシテ  
シテ信  
門ノ内ノ被入通  
多々寛  
ニシテ事の如ハ此也  
安度ナリ年少之ニ  
シテ之ノ所と生れておハ

樂也。子曰：「學而時習之，不亦說乎？有朋自遠方來，不亦樂乎？人不知而不慍，不亦君子乎？」

卷之三

蒙古文

人をもてんとせぬ事はあらざり  
正月の日もあらざり  
一三歳大半じよに満詰被り  
坐すとしよめど幼い身こどもあり  
乞食の如きの事こと本物ほんもの泡あわと  
川かわ音おとうるさく又また雨あめの音おとも  
家いえの鶴つるの声こゑと  
又また鳴なまめる清きよ楚すの鶴つるの聲こゑ

國の御場所は通う  
國の御場所は通う

細流  
称名隨雲  
公休公休

源氏物語抄之部題号并作者  
四邊光太臣義公  
元和年

余得閑著之

四邊花木各不同  
西之冬過遼東夏墮雲

公傳公書之。細流西之余過遼東夏陽公嘒若父我庶流革居肯柏牡

孟津抄  
九條淳西祖道公

明星抄 万水露路 湖月抄  
右の佐抄は漏脫せし事と以テ

漢書

契丹等處總管

廣通橋より至る所のうちより一處を取立す。其處は  
御神社の前である。あくまでも、御神社の前である。  
よもよもしては御座候る御神社の御神社の前である。  
ちかのくも高車とよきくは御神社の前である。  
高車よりの御神社の前である。拾遺の名前もよきくは御神社の前である。  
又、この中院セミホと通称され、通称の通称の父也。  
又、明早ねにこれを院室使ひて、一方火や火、火をと備し御用ねが北村季子也。

